The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪市における中年期の死亡率についての社会医学的検討
Author(s)	南澤, 孝夫
Citation	大阪大学, 1979, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32137
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【26】

氏名・(本籍)	南澤孝夫
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 4574 号
学位授与の日付	昭和54年3月24日
学位授与の要件	医学研究科 社会系専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**大阪市における中年期の死亡率についての社会医学的検討**
論文審査委員	(主査) 教授 朝倉新太郎 (副査) 教授 阿部 裕 教授 後藤 稠

論文内容の要旨

〔目 的〕

戦後，大都市圏では，農村部などより健康水準が優れているといわれてきた。平均寿命をみると，たしかに昭和20年代と30年代には，大都市圏が農村部などより高い順位を占めていたが，昭和40年代以後，大阪府など一部の都市化のすすんだ府県では，しだいに順位が低くなる傾向がでてきた。また大阪市における昭和50年の平均寿命を都道府県の順位にあてはめてみると，男子では40位，女子では46位に相当し，非常に低位にある。そこで，このような大都市圏の一部にみられる健康水準の低下について，その理由や背景を明らかにするため，大阪府における死亡の実態を，社会医学的な観点から検討した。

〔方法ならびに成績〕

分析，検討には，最近の国および大阪府，大阪市の関連資料を用いた。また訂正死亡率は，昭和50年の全国総人口を基準人口として直接法で計算した。

大阪市における死亡率の年次推移を，昭和35年を基準にして年次階級別にみると，死亡率は年次を経るにつれて全体的に低下しつつあるが，思春期と中年期では，死亡率の低下が著しく遅れている。また各年次別に大阪市と府下，全国を比べると，思春期では各年次とも，大阪市と府下との間でとくに大きな違いはみられないが，中年期では，年次を経るにつれて大阪市の死亡率が府下や全国より高くなっており，とりわけ昭年50年の大阪市における35～39才階級の死亡率は，男子では府下より63％，全国より36％，女子では府下より33％，全国より24％も高くなっている。

昭和50年における35～49才の訂正死亡率を，大阪市・府下・全国別にみると，人口10万に対して，

男子では365・295・311,女子では205・175・173となっており，大阪市の死亡率が，府下や全国に比べて著明に高くなっている。

このような大阪市における中年期の死亡率が，いかなる死因によって高められているかをみるため，昭和50年のおもな死因別死亡率について，大阪市と府下，全国との違いを比較検討したところ，大阪市では，非特異的に多くの死因による死亡率が府下や全国より高い傾向がうかがわれるが，とりわけ，全結核，肝硬変，自殺などの死因では，大阪市の死亡率が有意に高いことがわかった。なお自動車事故など，一時期大都市において激増した死因では，他と比べて差がないか，あるいはむしろ大阪市の死亡率の方が低い傾向がみられた。

つぎに，このような大阪市における中年期の死亡率の低下の遅れが，ドヤ街をかかえる西成区のような特定の地域における死亡率の異常な増加によるものか否かをたしかめたところ，中年期の死亡率が高いのは大阪市の広域にひろがっており，とりわけ男子では，西成区などのほかに臨海工業地域，女子では商業地域で非常に高いことがわかった。

中年期の死亡率について，以上のごとき特徴ある所見を得たので，これがどのような社会的因子と関連があるかをみるため，昭和50年の大阪市における35才～49才の男女別訂正死亡率と，住居，配偶関係，労働，生計に関する33種類の社会経済指標との相関関係をしらべた。その結果，男子の死亡では，生活，家族関係，就労の悪化を示す諸指標，女子では家族関係の悪化を示す諸指標との間に，高い相関がみとめられた。

大阪市では，他の地域に比べて，生活条件，家族関係，就労状態などがかなり悪く，このことが起因となって，生理的にも社会的にも悪条件をかかえた中年者の受療や健康管理を遅らせ，あるいは生活の乱れなどを起こして，健康の保持ができないという結果を招いているのではないかと考えられる。

〔総　括〕

大阪市の死亡の実態を検討し，つぎのような結果を得た。

1．大阪市では，府下や全国に比べて，男女とも中年期の死亡率の低下が著しく遅れている。

2．死因別にみると，大阪市では，おもな死因の多くで死亡率が府下や全国より高くなっているが，とりわけ，全結核，肝硬変，自殺などの死因では，この差が著しい。

3．地理的分布をみると，大阪市内で中年期の死亡率が高いのは，男子では臨海工業地域とその隣接地域，女子では商業地域となっている。

4．中年期の死亡率と社会的因子との関連をみると，男子の死亡では，生活，家族関係，就労の悪化，女子では家族関係の悪化を示す諸指標との間に高い相関がみとめられる。

論文の審査結果の要旨

最近，大阪市など大都市住民の健康水準の低下が問題視されるようになってきている。著者はその実態を解明するため，多くの統計資料によって，大阪市について死亡の実態を社会医学的に検討した。

その結果，大阪市では，戦前の死亡パターンの特長（若年及び高年令層における高死亡）と異なり，中年期の死亡率が他と比較して高く，その低下が著しくおくれていることが明らかにされた。このことは，「福祉社会」の下における都市保健施策のあり方を考えるうえで重要な問題指摘であると考える。